第 3 回俳句賞「25」選考会報告

第 3 回俳句賞「25」のダイジェスト版となります。書き起こしではない旨ご承知ください。

選考会は 2020 年 3 月 20 日（金・祝）に行われた。当初は公開選考会の予定だったが、コロナウイルス拡大の懸念から選考委員 3 名と実行委員会メンバーのみで行われた。
予選の結果は以下の通りとなった。

第 3 回俳句賞「25」　集計結果

（1 席 4 点・2 席 3 点・3 席 2 点・4 席 1 点で計算）

順位	番号	表題	遠藤委員	岸本委員	髙柳委員	合計得点
1	8	我らが日々に	4	2	4	10
2	18	地を出る	3	3		6
3	21	生まるる	2		2	4
	26	鰓呼吸		4		4
5	20	風巻			3	3
6	14	尽		1		1
	24	椅子			1	1
	25	生きてみる	1			1

岸本委員の 4 席、14『尽』

（岸本委員）「**鍛造の実習終えて梅雨寒し**」の「鍛造」は金属加工の実習を詠んでいるのだろう。また「**旋盤にたまる切り屑夏の夕**」の「旋盤」から工業高校を環境とした作品だと思った。作品の特徴は物を造る現場と俳句の季語との取り合わせ方に工夫があるところである。「**乾ききった空蝉コピー機のうめき**」、「**残暑ありトイレの古き世界地図**」、「**ビーカーのかすれた目盛り三冬尽く**」など即物的な質感をしっかりと捉えた句作りを評価した。最後の「尽」の畳み掛けは、このような連作型のコンクールにおいてそれほど効果を得ない場合があり、やや残念に思った。
（遠藤委員）私もこの作品は魅力的だと思った。25 句ひと塊での勢いがあった。類想もなく、全句視覚的である。最後まで迷った。印象的な句を挙げると「**バレッタは大きめが好き**

麦の秋」、「**ＳＬの煙夏木のなかを来る**」、「**アルバムの母は金髪盆の月**」、「**秋空へ還る風船のヘリウム**」、「**父は嫌い冬三日月の光りおり**」、「**ビーカーのかすれた目盛り三冬尽く**」、「**やり投げの順番待つや九月尽**」、「**ピアノには朝の冷たさ卒業日**」など。細かい指摘にはなるが、「ＳＬの煙」の句は、言葉の遣い方として「夏木」ではなく「夏木立」ではないか。また最後の句「ピアノには」の下五は「卒業す」もあるかなと。いずれにしても好きな世界観だった。

（髙柳委員）物がはっきり出ている作品であり、主観的な表現にも説得力があった。例えば「**バレッタは大きめが好き麦の秋**」の「好き」は効いていた。麦の実りを喜ぶ気持ちと、大きめのバレッタで気分も大きくなったような感じが合っていた。また「**ＳＬの煙夏木のなかを来る**」は確かに「夏木立」の方が正確だろうが、この荒い表現は句の内容にはあっているかと思う。「**残暑ありトイレの古き世界地図**」はきれいな景ではないが、古びたトイレの匂いや空気感がよく伝わってくる。こういうところにも趣を見出すのは大切なことだと思った。ただ「残暑あり」ではなく「残暑なり」なのかなと思った。最後の「尽」の連続が唐突に来ていて、意図を考えてしまった。「**ローファーのかかとの硬し四月尽**」とか「**やり投げの順番待つや九月尽**」など個々の「尽」の句は完成していると思ったが、ここまで並べた意図は読み切れなかった。「**ウインナーの目の虚無感や春日和**」など物を押さえて面白いところを掴んでいるなと思ったが、ウインナーの切れ目のことを目としていいのか疑問が残った。[1]

髙柳委員の４席、24『椅子』

（髙柳委員）独特な連作だった。25 句全てが徹底して椅子のことを詠んでいる。椅子をテーマとした狙いとしては人の気配を漂わせようと試みたのではと思った。椅子は人がいた余韻や形跡を漂わせるための、詩的で魅力的な題材として用いられている。明確な意図を感じ惹かれた。作品としては「**銀色のベンチ病葉照りつける**」は公園に置いてある金属製のベンチがぎらぎらと夏の日差しを反射し、病葉が照らされている景が見えた。人工的な空間で追いやられている自然の哀れさのようなものを詠めている。「**夏めくや新築に椅子二つ置く**」も惹かれた。これから人が住む新築。人そのものではなく椅子を詠むことで、これから住む友だちや夫婦や恋人を感じさせた。「**扇風機教師の椅子はキャスター付き**」、教室の風景か。生徒は素っ気ない椅子だが、先生だけはキャスター付きでふかふかな椅子だという特別感をうらやましがるような、学校生活の中でのちょっとしたことを詠んだ。「**レンタカーの椅子の固さや春浅し**」、レンタカーの特徴を押さえている。色んな人で共有する椅子の居心地の悪さのようなもの。「**椅子四つ運ぶ卒業式準備**」、椅子と卒業式はあるが「四つ」とまで踏

---

[1] 小休憩の雑談にて、キャラ弁でゴマなどで目のあるウインナーのことではないかということに落ち着いた。

み込んだ。在校生が駆り出されて両手で二つずつ運ばないといけない感じ。学校生活の過ぎてしまえば思い出せないささやかなことを言い留められている。椅子というテーマ性の強さもあり、また個々の句にも秀句も目立つ作品だった。

（岸本委員）椅子と人間は親しいというか、生活の様々な場所で出てくる。連作を通じて椅子の本質が分かってくる。ただ同時に椅子というテーマに揃えると季語との関係が悩ましく難しいと思った。「**扇風機教師の椅子はキャスター付き**」、「**流感の空席四つ灯油匂う**」、「**肘掛けの大きなソファ初電話**」など、時候や天文ではなく物がしっかりと入ってくる季語と椅子とが組み合わさったときはかなり強い。「**春近し面接を待つパイプ椅子**」の「春近し」や「**レンタカーの椅子の固さや春浅し**」の「春浅し」だと椅子を生かすためには失敗作ではないが、逆に季語の力を生かすという点では椅子に引っ張られているか。ただし、「**椅子の背の木目の深し五月晴れ**」は「五月晴れ」の明るさや日差しが椅子の木目に対してしっかり効いている。「**夏めくや新築に椅子二つ置く**」は「夏めくや」の初夏の風や光の差す新築というのがよかった。一つ一つを見ると秀句が多いが「春近し」、「春浅し」、「**保護者席から見る騎馬戦や涼新た**」の「涼新た」などの時候や天文の生かし方がやや惜しいと思った。

（遠藤委員）様々な角度から椅子をモチーフに作られていて意欲も感じた。髙柳さんは人の気配がテーマと仰って、なるほどと思ったが私はそこまでは読みきれなくて、その一方で椅子が縛りにもなっているかなと一読したとき思った。でも椅子というテーマを忘れても好きな句は多くあって、「**夏めくや新築に椅子二つ置く**」は視点がよい。若々しいなと思ったのは「**涼み台人類は二足歩行に**」。私には詠めないなと思ったのは「**保護者席から見る騎馬戦や涼新た**」、「**コンビニのイートイン席日脚伸ぶ**」、「**椅子四つ運ぶ卒業式準備**」、「**卒業や椅子にシールの跡残る**」。よく見ているなと感心。迷わずに何でも句にすることのできる、ある種自由な詠みぶりをうらやましく思った。

遠藤委員の４席、25『生きてみる』

（遠藤委員）あまり詠まれていない視点からの句が多い気がした。若々しい気負いに惹かれて取った。句の世界が幅広い。力強く王道で詠んだ句としては「**断層に海の名残や神渡し**」、「**銅鐸を覗けば冬の夜の匂ふ**」。さりげない句としては、「**冬鷗ひとりで座る四人席**」。詠まれているかもしれないが、「冬鷗」がよかった。「**海兵のダンクシュートやソーダ水**」、これはまるでポスターを見ているような映像感があり、印象的。「**パンジーが咲いてピアノは長調に**」、「**湯冷めして首を短調が伝ふ**」など意味の連続を絶った面白さ。私は感覚や観念を詠むことに抵抗はないが、具象性にやや乏しいことで、世界が広がりきらないかなと思い４席とした。勿論好きな句も多かったが分からない句もあった。「**六の花記憶は端つこが柔い**」の「記憶は端つこが柔い」は秀抜で、記憶の漠然としたところや抽象性をよく捉えていると思ったが、何故季語を「六の花」と雪を表す古めかしい季語にしたのか気になった。全体を通して魅力があった。

（高柳委員）「**海兵のダンクシュートやソーダ水**」は基地の街で見かけたワンショットか。日本において基地は違和感として詠まれがちだが、この句は普段の生活に溶け込んだ生き生きとした海兵が詠まれていてよかった。ソーダ水を飲んでいるのは自分か、バスケをしている海兵たちか。どちらにとってもソーダ水の明るさが生きる。常識的な基地俳句に対して違うところを見せることに成功しているという手応えがあった。確かに抽象的なところはあり、そこに選者としては物足りなさがあったかもしれないが、「**ストーブの奥にこころのありにけり**」はストーブの火を見つめながらある思想や感情に浸っているという感じで、心に目を凝らしているといったという成功があった。「**銅鐸を覗けば冬の夜の匂ふ**」は観念的だが、この詩的感覚は肯えるものだった。冬の夜が「ある」ではなく「匂ふ」とまで言ったことで、現代のように汚されていない太古の冷やかな大気が感じ取れる。「六の花記憶は端つこが柔い」は賛否が分かれる作品だったようだ。自分はこの句を理解できたように思う。普通の雪の季語だと句が甘くなり過ぎるように思う。敢えての古めかしい呼称が合ったのかなと。全体的に言い留められず、舌足らずな句もあったと思う。

（岸本委員）この作品の特徴は見立て、つまり別の言葉に言い換えて表現することかと思う。その試みが上手く行っている句と行っていない句がある。「**六の花記憶は端つこが柔い**」は、「端つこ」ということで逆に記憶にはコアがあることが分かる。中心部は生々しいが周辺部は柔らかで朧げということと、雪の醸し出す回想とが上手く合っている。はっきりとした見立ては「**無花果を空気分け合ふやうに割る**」、要するに割っているだけだが、それを空気とまで言った。「**曇天を引きずつてゐる毛虫かな**」、毛虫が曇天を引きずることは決してないが、毛虫の背の毛に映っている光がそのように感じられるという。「**無気力な雷光落ちて来たりけり**」、雷の光が衰えてきたように感じたのだろうか。「ストーブの奥にこころのありにけり」もまた見立てである。火を見ながら醸し出される感情を「こころ」という言葉にした。一人の作者かどうかは知らないが、「**冷やかを一段おきに置いてゆく**」、「**湯冷めして首を短調が伝ふ**」、「**うつかりとして飯蛸がゆで上がる**」、「**思ひ出し笑ひのやうな桜かな**」という句は手の内が見える。これらはチャレンジングだがどれも上手くいっておらず、工夫の余地があると言える。面白いと思ったのは「**海兵のダンクシュートやソーダ水**」。また「**夕月夜誰かは乗つてゐる汽笛**」。これは懐かしいアニメのような景色だが、きっと誰かが乗っているんだろうなと思うことと「夕月夜」の情緒がいい。「**隣国のはうへ秋蝶流さるゝ**」、この句も風が吹く国境として面白い。このように見立てに頼っていない句の方が成功率が高かったかなと思った。

高柳委員の２席、20『風巻』

（高柳委員）季語の使い方に心を砕いている作者たちだと思った。「**火に油夜咄に酒昇る月**」、夜咄という季語の伝統的なイメージをくみ取った作品。「**心拍の波形眺むる聖夜かな**」、「**みそ汁の出汁変へてみむクリスマス**」、日本のクリスマスは厳粛なものではなくお祭り騒ぎみ

たいなところがある。それに対し病院での検査のレーダーを見つめていたり、ケーキや七面鳥ではなく試みに変えてみた味噌汁という、生活との地続きであったり。こういうクリスマスもあるんだという提案が感じられた。季語の塗り替えをしようとする意欲を感じた。「**ワイパーに銀杏落葉をはさみたり**」、無機質なワイパーを合わせたことには惹かれたが、「はさみたり」だと敢えてした感じがするので「はさまるる」くらいでいいのかなと。ワイパーと銀杏落葉を取り合わせることで季語を塗り替えたいという意欲があり余って「はさみたり」になったのかなとも思う。「**凍鶴や寝たきりの子の足を揉む**」。親の立場から病気の子の足を揉んで少しでも楽にしてあげようということか。実際にはそこにはいないだろうから本来の季語の使い方ではないのだが、足が非常に痩せ衰えていることの暗示や幻としての凍鶴かと思った。よい句として「**革靴で蜜柑摘みたる日暮れかな**」。学生の俳句コンテストであるという趣旨からいくとローファーかなと思うが、仕事帰りの革靴と取ってもいいかなと思った。会社から帰ってきたその家は兼業農家のような感じで、彼も手伝っているという感じかと。蜜柑というものに対して、地中海性気候の温かい感じに対して革靴という冷たくて社会的なものを持ってきたりと、なかなかチャレンジングな句かと思った。何かすれ違ってしまっていて、季語とも取り合わせが上手くいっていないものもあるかと思ったが、それもまた果敢なる挑戦心の表れ故かなと思った。

（岸本委員）全て冬の句だった。「**星繋ぎ帰りの道を探したり**」、季語はどうかなと思ったが無季ならそれはそれで問題はない。一人の作者の句ではないが、全体のトーンとしてはささやかな感じ。そして少し屈折感。「**心拍の波形眺むる聖夜かな**」の「心拍の波形」は健康診断や病気にならないと気にしないことである。また、「**天狼は僕等をひょいと越えていく**」は「僕等」という（明るい）言葉は使っているが、「越えていく」は越えられてしまって僕らはぽつんと残っているような感じ。「**凍鶴や寝たきりの子の足を揉む**」や「**冴ゆる夜病院からの電話かな**」などふとした淋しさを感じる瞬間に興味を持って俳句にしているなと。「**革靴で蜜柑摘みたる日暮れかな**」は「取る」と言わずに「摘む」というのも面白いが、これも蜜柑農家の幸せというよりも、何か一抹の違和感を覚えながら生きているという印象が「革靴」にある。辛さが現れることは俳句と相性はいい。問題は季語で、「**天狼は僕等をひょいと越えていく**」の「天狼」、「**虎落笛イヤホンをまたつけ直す**」の「虎落笛」である。「**凍鶴や寝たきりの子の足を揉む**」は髙柳さんの深い鑑賞の通りだと思った。季語をどこまで上手く消化できるかが勝負どころ。「**室外機並ぶ小道や冬の風**」の俳句っぽくない「冬の風」が面白い。この連作は実は上手くまとまっていない。色々な屈折や屈託があちこちで綻びを見せているような印象もある。それは魅力でもあるが、評価する側としては責任が持てないなというところもあり、迷った。

（遠藤委員）私が 4 席に選んだ 25「生きてみる」とは対照的な作品だった。「生きてみる」は一読で雰囲気が心にすーっと入ってくる感じ。こちらの作品は読み手に対して一度止まってちゃんと読め、と言っている句が多い。そこは力があるなと思った。メッセージ性があるというか、季語に何を託そうとしているのかと私に問うようなところがあった。「**天狼は**

僕等をひょいと越えていく」、「**凍星やマイクロフォンのきんと鳴る**」、「**寒厨に製氷音のつつましく**」、「**凍鶴や寝たきりの子の足を揉む**」、「**サイフォンに広がる泡や年の果**」、「**革靴で蜜柑摘みたる日暮れかな**」などは好きな句だった。ただ何となくこなれていない表現と感じるものもあって、でもそれはそれで読みごたえがあるなとも思ったりもした。お二人とも「**凍鶴や寝たきりの子の足を揉む**」を取り上げられたが、私は季語がその場にあるものでなくてはならないとは考えない。それよりも女性的・母親的視点かもしれないが、「寝たきりの子の足を揉む」に対して「凍鶴」という季語を配したことが心に引っかかった。細くなった足を表しているのだろうが、何となくやるせない気がした。もうちょっと優しい季語でもよかったかなという個人的感想を抱いた。いずれにせよしっかりとして、選者に読んでくれという作品だと思った。

遠藤委員と髙柳委員の 3 席、21『生まるる』

（遠藤委員）月並な言い方だがポエジーがあって手垢がついていない。俳句もまた一行の詩であることを感じさせる。不思議さや軽やかさが長所でもあり、もしかしたら少し弱いところかもしれない。媚びない自由さが私は非常に好きだった。作品はバラエティーに富んでいて、きちんとした句も詠んでいる。「**葛の花ひとひに雲はいれかはり**」の確かさ、「**水晶を覆ふびらうど雪催**」のビロードの質感と季語の妙味。これはビロードが「びらうど」となるかは分からなかったが。「**なんとなくわかるインコの歌や春**」、「**単線の町に浮輪を膨らます**」もよい句。「**秋近し緑の多き教習所**」この句は教習所の秋近い植え込みの緑を、現実感を持って詠んでいる。「**しやぼんだま消えて遠くはない言葉**」、「**くらがりに猫ら落ちあふ蛇苺**」、「**土塊のかたちに死んでゆく牡丹**」、このあたりの句は非常に詩に近くなっている。一言では言えない魅力があると思った。「**しやぼんだま消えて遠くはない言葉**」は意味の連続性を絶って、効果的に詩情を出した。こなれていない表現や、あまり分からない句もあったが、この 25 句は好きだった。「**スモーキーマウンテン大陸めく残暑**」、「スモーキーマウンテン」はフィリピンのマニラのスラム街という風に辞書に出ていた。こういう句も詠むんだなと、残暑が効いている。自由な詠みぶりであり、「**膵臓は雲に似てゐて秋の夜**」の自由さ。私は膵臓を見たことはないが、何となく惹かれるところがある。あちらこちらから句に仕立てる楽しさ。「**寒林を超えクラークの指の先**」、クラーク博士かなと。札幌を指しているのかなと。「**はたはたと夏にかくれてゐるカーテン**」、これはわざと屈折した表現をしていて、それが妙な味わいを生んでいる。その屈折した表現を邪魔に思うときと、自然に入ってくるときがあって、この句は成功していると思って取った。とにかく面白かった。

（髙柳委員）題材の新しさ。あまり人が詠まないようなところを意識的に取り出している感じ。「**麗かやパイプにモルモットの渋滞**」、モルモットは実験動物としてこういうところを走らされる。2、3 匹が渋滞して詰まってしまっている。この句のように新しいだけには終わらず、俳句的詠み口に落とし込んでいる。この句にマイナスの季語をつけると、哀れが過ぎ

るのだが、俳句らしくないところから出発して、俳句らしいところでゴールしている。他に秀句として「**単線の町に浮輪を膨らます**」、田舎町の線路を見せておいて一気に浮き輪に行く。海のイメージが広がり、鄙びた海辺の町であることが分かる。この場合は展開に工夫がある。「**寒林を超えクラークの指の先**」、これは新しい句材ではなかったが、よい詠みぶりだと思った。寒林を「指している」だと常套的だが、「超えている」としている。「**爽やかやイヤホンを巻く手のしづか**」は惹かれるが、「爽やか」が季語としての抑えが効かず曖昧でうやむやで、もう少し欲張りたい。「**スモーキーマウンテン大陸めく残暑**」、「膵臓は雲に似てゐて秋の夜」はあまり成功していないかなと。弱点もあるかなと思いつつ、新しい題材を見つけ、またテーマに呑まれず詠みこなす力があった。

（岸本委員）評価されているのは題材が多種多様であること。季語以外の部分で「モルモット」、「イヤホン」、「スモーキーマウンテン」と色々な材料を俳句として消化できている。あとは言葉の技巧でいうと、季語ではない言葉のハードルが高いので季語との取り合わせが上手くいっているか気になるところ。「海の日の空をたゆたふ飛行船」、実際に「海の日」なのだろうが「海」、「空」、「船」というあたりに理屈が見えたかなと。「**はたはたと夏にかくれてゐるカーテン**」は異様だ。何も考えずに読むと面白いのだろうな。「**単線の町に浮輪を膨らます**」、これは相当省略している。でも「単線」が引かれている「町」を「単線の町」と俳句では言っていい。「**くらがりに猫ら落ちあふ蛇苺**」、面白い。「落ちあふ」とは出先で会って歓談することをイメージするが、猫には猫の付き合いがある。蛇苺のあるところで猫たちは何をするのだろうと楽しめる句である。惜しいなと思ったのは「**石炭のできそこなひといふ黒さ**」である。「卓上の石炭一箇美しき／三橋敏雄」とあるように石炭は冬の季語であるが、「といふ」が苦しい。「できそこなひ」を生かすには下五は工夫がいる。まだ未完成。「**飛花落花美術館てふ美術品**」、この「てふ」が弱い。美術館自体が世界遺産になっているという、言いたいことは分かる。このままでは事柄の説明。「**土塊のかたちに死んでゆく牡丹**」、牡丹の滅びの姿を描くチャレンジングな句だが、惜しいのは「かたち」だけではなく「色」や「匂い」も土塊に似ているのだろうが、「かたち」という言葉で限定したのが惜しい。「かたち」は別の言葉に置き換えが効くのでは。「**膵臓は雲に似てゐて秋の夜**」は「膵臓」を見て「雲」を連想している。「肝臓」から「雲」を連想するのは医者だろう。「**葛の花ひとひに雲はいれかはり**」は見事な句。

（この句を本選に残すかどうか司会に尋ねられ）

（髙柳委員）「**くらがりに猫ら落ちあふ蛇苺**」は巧い句だと思った。蛇苺の蛇と猫が絡み合うようなイメージも膨らんで。「**はたはたと夏にかくれてゐるカーテン**」、私も気になった。「夏をかくしてゐるカーテン」とかにすると簡単だが、しかしね…。

（岸本委員）夏に対して隠れているのだろう。

（髙柳委員）夏に対してカーテンとその周りの部屋の空間が隠れている。もう一歩という感じ。

岸本委員の１席、26『鰓呼吸』

（岸本委員）個々に感心した句が多数あった。最初の数句は弱いと思った。真ん中から後ろにかけてよい句があった。「**軽トラは春の堤に見え隠れ**」、土手の上の道を軽トラが走っているというだけだが、「軽トラ」という言葉が俳句で生きている。「見え隠れ」という何でもない風景がよく出ている。「**見下ろして掬ふ金魚の瞳かな**」、金魚掬いで我々は見下ろして、金魚は正面を向いてという人の目と金魚の目が興味深い。「**秋めくや土嚢引き摺りひきずられ**」、台風の準備のようで「引き摺り」までは普通だが、「ひきずられ」とまで言い土嚢の重さを表した。「**すれ違ふリフトは無人霧襖**」は文句なしに上手い。「**どの星の産声ならむ蚯蚓鳴く**」、俳諧的な「蚯蚓鳴く」という季語に暗い星空の星の誕生を詠んだ。大きなことを抱えているが、俳句としてのまとめ方が巧み。「**虫籠や階は音昇る場所**」、虫籠と階段の位置関係が描きにくいが、虫の声と家の中の階段に音が伝わってくる感じ。「**鐘楼の微かに揺れて子規忌かな**」、「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺/正岡子規」への挨拶句と思った。「**風薫るかつて象牙を売る港**」の「風薫る」と「象牙」の取り合わせもよかった。「**人間のやうに寝る犬夏の月**」はふふっと笑った。「夏の月」で無造作でよい。「**稲刈りの父をバス停から眺む**」は父が農家で、子どもが勤め人、あるいは生徒という句。一句一句の完成度がかなり高かった。

（遠藤委員）この 25 句から、俳句の型が身に着いていることが伝わった。季語が時候から生活に到るまで用いられており、また季語をおろそかにしていない。傷が少なく、巧い。巧さからさらに一歩抜きんでようとする句も散らしてあって、俳句に精通しているなという感じ。高く評価したのは「**軽トラは春の堤に見え隠れ**」、「**くらくらとゆるる風鈴朝来る**」、「**風薫るかつて象牙を売る港**」、「**人間のやうに寝る犬夏の月**」など。特に好きだったのは「**稲刈りの父をバス停から眺む**」。このようなきちんとできた句に対して、わざとかは分からないが、「**味噌汁をひと回しするカーネーション**」を置いているが、この句の取り合わせが成功しているかは分からなかった。「**暗号を解けば夏蝶群がりぬ**」は知的な作りが成功している。最後まで迷った連作だったが、巧くまとまりすぎている感もあった。

（髙柳委員）「**稲刈りの父をバス停から眺む**」はとてもいい句。通学や通勤の帰りのバスだろう。「バス停」はバスに乗って人を動かすもの、それに対し「稲刈りの父」はその地に留まって稲刈りを繰り返すという。いつかこの作者がこの田舎からバスに乗って出ていってしまう未来も予見される。「**どの星の産声ならむ蚯蚓鳴く**」、「**風薫るかつて象牙を売る港**」、「**暗号を解けば夏蝶群がりぬ**」、実景としての夏蝶というより喜びとして取った。ただ一方で読者を悩ませる句もあったのかなと。「**味噌汁をひと回しするカーネーション**」のカーネーションが最後まで読み切れなかった。母の日の翌日の朝の食卓か。一連の作品としては導入部は弱かった。「**仏像の裏にも顔や冬ぬくし**」、これから始まると弱くて勿体ない。こういう句は積極的に捨てる、あるいは一句目からは外す。「**理不尽に布を被せて炬燵とす**」、炬燵視点の面白さ。布をかぶせられ、問答無用で足を突っ込まれる炬燵は、もしかしたら理不尽

を感じているのかも。これはよくできた句ではないが、連作の魅力と数えてもいいのかなと。

遠藤委員と岸本委員の２席、18『地を出る』

（岸本委員）一読して沖縄の素材を詠んでいることが分かった。特徴的だと思ったのは「**平和記念公園てふを冬の蝶**」、「**冬晴れや右へ左へ軍用機**」。「てふ」で「平和記念公園だとかいうものを」というニュアンスをだした。「右へ左へ」に思想的なものは全然顕わではなく、むしろ淡々とした視点。少し距離感を置いて詠んでいる点は、に詠むよりも、作者の思いやこだわりを感じて高く評価できた。純俳句的にしっかりできているのは「**持ち上げて海鼠に足のやうなもの**」など。足のいぼを詠むなら今までもあったかもしれないが、「持ち上げて」で手触りが生まれた。「**甲板の手摺を小夏日の潮か**」、「小夏日」という沖縄のある季節の潮煙のようなものが手摺を濡らす。「**銃痕は石となり柊の花**」、「**セーターの伸びやかソーキそば啜る**」、「**オレンジに灯り寒夜の名護の海**」、「**凩に晒されてゐてタコライス**」、ここらへんの勝負句ではない句も上手くつないでいて並べ方も巧い。

（遠藤委員）この作品の一句目が「**控へめに畳みて飛行機の毛布**」から始まることで沖縄在住の人ではなく旅人かなと思った。でもいわゆる旅人の句ではなくある種の風土詠にもなり得ていることに惹かれる。沖縄といえば夏を詠むものが多いが、今作の句は全て冬であることも果敢だなと。季語が多彩で場面の転換を生む。好きな句は「**冬麗や丸く尖りて珊瑚礁**」、「**甲板の手摺を小夏日の潮か**」、「**持ち上げて海鼠に足のやうなもの**」、「**オレンジに灯り寒夜の名護の海**」、「**凩に晒されてゐてタコライス**」、「**慰霊碑を離れて裸木の二三**」、「**十二月八日地を出る珍穴子**」、「**琉球の空を靡ける蒲団かな**」など。「タコライス」はメキシコのタコスの具をご飯に載せたものだが、そういう何気ないことを詠むことにも沖縄の多様な文化が現れている気がする。戦後に置かれた状況を今に伝えているようで、ただの旅行ではない。表題になっている「**十二月八日地を出る珍穴子**」、十二月八日に対して「地」という言葉を敢えて使ったのかもしれないが、やはり「海底」や「砂底」ではないかなと。沖縄の特色が出ている作品だと思った。

（髙柳委員）「**潮風の吸ひ付く頬や冬浅し**」、色々季節を置き換えて考えてみたが冬も深まって頬を切り裂くような冷たさではないのだろうなと思い、「冬浅し」が効いている。好きな句は「**平和記念公園てふを冬の蝶**」、「**冬晴れや右へ左へ軍用機**」。乱暴で読者を置き去りにする言葉遣いが目立ったかなというところ。逆にこのような言葉遣いが人の心をつかむこともあるが、この一連の中では乱暴なままだったかなと。例えば表題になっている「**十二月八日地を出る珍穴子**」、水底の土を地とは言わないだろう。表題句なだけに重く見て、やはり気になった。表題句は用心深く作ってほしい。また「**冬麗や丸く尖りて珊瑚礁**」、よく分からなかった。恐らく「丸く」と「尖る」という正反対の言葉を組み合わせて驚かせようとしただけなのかなと。「**琉球の空を靡ける蒲団かな**」、相当強い風だったのかもしれないがそれなりに重量感のある蒲団が靡くかしらと違和感を覚えた。一連として沖縄の吟行句で構

成されていて、敢えて深くはタッチしない。統一感はあるが、なりふり構わない作者たちではないだろうから、一つ一つ丁寧な言葉の感覚を生かしてほしかった。
（遠藤委員）「**冬麗や丸く尖りて珊瑚礁**」、珊瑚礁のサンゴの突起の一つ一つがとんがっているが全体は丸いと言いたいのかも。それだとせめて「尖りて丸く」くらいだったか。ここらへんに不用意なところはあるかもしれない。一つ一つは触れると痛いが、視覚的には全体的に丸く見えるというようなことが言いたかったのか。
（岸本委員）こういうときは丸いことで一句、尖っていることで一句と別の句にした方がいい。想像はできるが、言葉で描き切れているか疑問である。

遠藤委員と髙柳委員の１席、岸本委員の３席、8『我らが日々に』

（遠藤委員）表題が一連の作品にふさわしいと思った。奇をてらわず、今この時代を刻印しようとしている。叙情性も青春性もあって具象的。みずみずしい幸せを感じた。自由に詠んでいるようで定型感もある。直球のよさがあった。「**校門を出て見上げたる冬満月**」、「**自転車は立漕ぎでいく冬の夜**」、既に詠まれている世界かもしれないが、そんなことは意に介さず詠んでいる感じもよかった。好きな句としては「**水道水細し残暑の体育館**」、「いなびかり北よりすれば北を見る／橋本多佳子」のような「**稲妻や仰げばすでに空暗し**」、「**日向ぼこ心に猫を飼う人と**」。甘さにはいききらない詩情のある「**放課後の永遠めきて冬茜**」。写生が効いている「**木枯に鳩ぱつと飛ぶ背の白さ**」。「**区民館にドリブルの音冬の星**」、「**猫撫でるように初氷に触れる**」、あまり雪が降らない地域ならではのふとしたときめきが伝わる「**雪積もる道を選びて歩きけり**」。
（髙柳委員）「我らが日々に」というタイトルにあるように、書き留めないと意識のエアポケットに落ち込んでいく日々を書き留めている感じが好印象。他のジャンルと比べて俳句こそ得意なところを分かっている感じ。秀句として、本当は消えそうだがレトリックの誇張が効いている「**ジャンパーの肩いつまでも消えぬ雪**」。「**雪積もる道を選びて歩きけり**」、珍しい雪を踏みしめようと敢えて遠回りをするような。「**運動場白線上のいぼむしり**」、色のコントラストも鮮やか。軽妙な句柄だけでなく、「**放課後の永遠めきて冬茜**」、「**木枯や校歌の海を見はるかす**」、など時空間に広がりのある深いところにも句が届いている。ありきたりの「体育館」ではなく、「**区民館にドリブルの音冬の星**」の上五の字余り、日記風の上五中七もよかった。
（岸本委員）材料は奇をてらわないが、俳句だからこそ書けるところを書いている。注目句として最初のタイプは誰もが見ている光景の巧さ。例えば「**稲妻や仰げばすでに空暗し**」、「**校庭に審判の笛秋澄めり**」、「**木枯に鳩ぱつと飛ぶ背の白さ**」。もう一つのタイプは、「**放課後の永遠めきて冬茜**」の「永遠」という言葉の大きさ。「**十六の我振り返り冬に入る**」、隠者のような書き方。「**日向ぼこ心に猫を飼う人と**」、これも隠者的。「**友二人歩調のそろう小春かな**」、普通は話に夢中になるところが、距離を置いた書き方。「**黒板を大きくつかう冬日**

和」、普通黒板の中身に入ってしまうが、こちらも距離感のある書き方。物事に対する自在な距離感が面白い。「**木枯や校歌の海を見はるかす**」の距離感がさらに大きくなると、「**放課後の永遠めきて冬茜**」になるのだろう。後半の「**「暇なの？」と塾の先生三が日**」、悪い訳ではないがやや弱い句の塊があったか。

一通り評が済み、8『我らが日々に』、18『地を出る』、26『鰓呼吸』に絞って再検討が進められた。

（岸本委員）26『鰓呼吸』は個々の句の粒だった面白さがよい。一人の作者ではないことから、25 句をランダムに句合わせして旗を上げたら、8『我らが日々に』より 26 の『鰓呼吸』の方が強いのではないかなと。客観的に序列をつけようとするとそういう言い方になってしまう。

（高柳委員）18『地を出る』には点を入れていなかったという点からもこの 3 作品の中だと、『我らが日々に』か 26『鰓呼吸』かなと。26『鰓呼吸』にも点は入れていなかったが、取るとしたら 26『鰓呼吸』である。マイナスの句を数えていたらきりがないので、よい句で評価するのが正統かなと。26『鰓呼吸』は飛び抜けた句がぽつぽつあるかなと。ただ最初の数句の弱さがどうも気になる。連作の場合だと、組み立て方も大切。

（遠藤委員）8『我らが日々に』は頭一つ抜けていいと思った。18『地を出る』を推してはいるが、26『鰓呼吸』も一つ一つがよいので、秀逸十句の候補に複数句入れていた。18『地を出る』と 26『鰓呼吸』は系統が違うので比較は難しく、同点である。

以上の議論を経て 8『我らが日々に』を大賞とする方向が見えてくる。

（岸本委員）8『我らが日々に』は弱い句もあると思うが、26『鰓呼吸』も同じくらい弱い句があることはある。8『我らが日々に』の難しいところは、一見つかみどころがなくてふわっと広がる句をどう読めばいいかというところ。しかし並んだ句を読むと確かに世界は広がる。

（高柳委員）8『我らが日々に』は学生っぽいが、26『鰓呼吸』は学生っぽくはない。8『我らが日々に』が受賞すると応募する高校性たちは「この賞は学生っぽいことを詠まないと」と思われないように、そうではないことを一言伝えたい。26『鰓呼吸』の年齢や性別を感じさせない読みぶりもよかったが、単純に作品として 8『我らが日々に』がよかった。

（岸本委員）高柳委員は 8『我らが日々に』を学生っぽいと言う。確かに「**校庭に審判のの笛秋澄めり**」の「校庭」や、「**放課後の永遠めきて冬茜**」の「放課後」や、「**木枯や校歌の海を見はるかす**」の「校歌」など材料は学生っぽいが、「**黒板を大きくつかう冬日和**」や「**友二人歩調のそろう小春かな**」はむしろ我々年配者の思う学生らしさとはずいぶん異なる。隠者という言葉で言ったように、必ずしも学生っぽいという訳ではないかなと。

（高柳委員）学生も色んなタイプがいますからね（笑）。あるタイプの学生らしさかなと思った。

（遠藤委員）たくさんの応募作が学生生活を詠む中、これはひとつ抜きんでていた。

そして第三回俳句賞「25」大賞は横浜翠嵐高校の8『我らが日々に』に決定した。また奨励賞として、名古屋高校の18『地を出る』、洛南高校の26『鰓呼吸』が選出された。
続いて各委員の秀逸十句が発表された。

秀逸作品

遠藤由樹子選　秀逸十句

3　水筒とタオルが並ぶ炎天下
長崎県立佐世保東翔高等学校　三年　大坪菜月

7　信号の赤濁りたる吹雪かな
岩手県立水沢高等学校　二年　鈴木萌晏

8　水道水細し残暑の体育館
神奈川県立横浜翠嵐高等学校　三年　野澤みのり

16　わが呼吸分け与へたるしやぼん玉
星野高等学校　一年　田中望結

17　葱の肌くくぼと撫でて洗ふかな
星野高等学校　二年　小久保羽琉

20　寒厨に製氷音のつつましく
北海道旭川東高等学校　二年　工藤羊平

21　なんとなくわかるインコの歌や春
立教池袋高等学校　三年　笹川佳那人

22　懐かしき春日英訳なきと知る
高田高等学校　一年　綱谷菜桜

26　稲刈りの父をバス停から眺む
洛南高等学校　一年　川田美紀

27　熊穴に入る甘えたくなる季節
慶應義塾湘南藤沢高等学校　三年　東郷寿日太

岸本尚毅選　秀逸十句

26　すれ違ふリフトは無人霧襖
洛南高等学校　二年　竹内優

18　持ち上げて海鼠に足のやうなもの
名古屋高等学校　二年　鬼頭孝幸

8　木枯に鳩ぱつと飛ぶ背の白さ
神奈川県立横浜翠嵐高等学校　三年　野澤みのり

17　きりぎりす組体操の塔の立つ
星野高等学校　一年　東風平梨緒

7　襟巻きに頬鼻耳と沈めたり
岩手県立水沢高等学校　一年　菅原羽美

15　春光のベンチが朽ちてゐて静か
群馬県立高崎高等学校　二年　須藤神唯

21　葛の花ひとひに雲はいれかはり
愛光高等学校　三年　近藤匠也

1　枝先の水木の花を遠望す
長崎県立佐世保東翔高等学校　三年　石田裕人

16　ありがたう春の墓石に刻まるる
星野高等学校　二年　野城知里

14　鍛造の実習終えて梅雨寒し
岩手県立盛岡工業高等学校　三年　市村真都

高柳克弘選　秀逸十句

7　大空へ飛んだのか案山子の帽子
岩手県立水沢高等学校　一年　里舘園子

8　放課後の永遠めきて冬茜
神奈川県立横浜翠嵐高等学校　三年　長谷川愛奈

16　ラムネ瓶覗く世界が泣いてゐる
星野高等学校　一年　田中望結

17　祖母の手は魚の匂ひ魂迎
星野高等学校　二年　小久保羽琉

19　山茶花や会つたからつて喋らない
海城高等学校　二年　江島朋之

20　火に油夜咄に酒昇る月
北海道旭川東高等学校　二年　工藤羊平

21　麗かやパイプにモルモットの渋滞
立教池袋高等学校　三年　旗浩平

23　玉葱の香や成績の返る朝
青森県立八戸高等学校　一年　平こころ

24　銀色のベンチ病葉照りつける
愛知県立岡崎東高等学校　一年　鈴木秀昌

25　海兵のダンクシュートやソーダ水
洛南高等学校　二年　奥井健太

最後に各委員から応募者へのメッセージが送られた。
髙柳委員からのメッセージ。
取り上げるのはどうしても一部となってしまう。句を一つ一つ見ていくとどの作品にも秀句はあった。あとはそれをどれくらい増やしていけるか。俳句の評価はどうしても主観的なところもあるが、読者を誰に想定するかということを考えるのは大事。世代が違う人、親や友だち以外にも、過去にも未来にも普遍的に響くかどうか。選者にすり寄れ、ではない。仲間はどうしても親切に読んでくれるかもしれないが、一歩外の場ではシビアに一読で響くかを評価されることもある。読者の壁を突破せよ。心の中に厳しい読者を一人置くといいかもしれない。

岸本委員からのメッセージ
読みごたえが大変あった。敢えて髙柳委員と逆のことをいうと、読者を信用してほしいともいえる。色々な俳句を知っている読者が読んだときにどう見えるかを考えるのは大事だが、読者の方で精一杯の想像力で読みとこうとしているので、意外と句の核のところは伝わってくる。

遠藤委員からのメッセージ
魅力のある作品が揃い、読者としても楽しませていただいた。普遍的な俳句が実は些末で刹那的なところに宿っているかもしれないのが、俳句の難しくもあり、面白くもあるところ。作者は自分の言葉やその感度を信じて、一方で自分に甘くはならないように詠むことが大切。自信を持って楽しんで詠んでほしい。